

中田一矢



この状況をどう楽しむか

生きるのは
最高だ!!
ありがとう
中田一矢

オヤベ金板工業の二代目・中田一矢さん。小学3年生から親父の影響でスノーボードをはじめた。

「中一から冬の間は全然学校に行っていないです。友達からは『なんで冬は学校来ないんだろ?』って。」

中学2年から少しずつスポンサーが増えていく。何も分らず、何も変わらさず…。親が全面的にバックアップしてくれた。

高校生からはずっと自宅の板金のバイトとして活躍する。将来について考え始めたのは大学4年頃。

「スノーボードでずっとやっていくのか。親父の仕事を継ぐのか。」

最初は12社だったスポンサーも、大学3年になった頃には2社ほどになっていた。

出来上がってしまっただけの選手にはスポンサーはつかない。年間6試合、1試合50万円程度。選手オナーリーでは食べていけない。

今30歳。大学卒業後、普通に板金屋になる。自然と…。

「スノボ関連の仕事はあった。ただ、ずっと恩を感じていた。スノボができたのは、親父と会社、そして皆のおかげだよ。」



「お前は板金やるために生まれてきたんだろ」と会社の先輩から言われ、確かにそうだと感じた。」

今は、職人として上を目指している。たとえば、全く同じ家が4つあり、同じ作業があるとする。それなのになぜか、この家はわがまま。この家は素直と違いがでる。

「板金の仕事ですごく難しく、分らないことを解明したい。そんな欲求がいっぱいあります。」

スノーボードは、今年でプロ登録を自ら辞めた。それでも、来年もプロと言います。

お金をもらってからプロなのか、教えるのがうまいからプロなのか、資格を持つているからプロなのか?」

「俺にとってプロは、意識しているか、していないか。やらされてる感がちよつともあったらプロじゃないと思う。」

ではなぜ、自然と板金屋になれたのか?

美空ひばりの「川の流れるように」の歌。宮本武蔵の「考えを止めるな。川の流れば決して止まらない」という考え。

「その言葉がバーンと頭の中に入ってきた。板金もスノボも、もともとそこにあつたもの。よし行けと。」

もうひとつ。大学の時に読んだ詩。どの道でがんばるではなく、選んだ道でどれだけやるか。

「ああ、今までやってきたことを頑張ればいだけやな。目指していることは、カタチではないけど、自分自身で納得すること。ただ、我がままにこだわるだけ。」

父親は、やりたかつたらやればいいと言ってくれた。「やりたいことはいっばいあつたけど、楽しみを見出すことが大切。楽しむることしか考えません。」

スノーボードの海外のコーチに言われたことがある。すごく寒くて、視界がない。そんな時、『この状況をどう楽しむかだけ集中しろ』と。

仕事も同様。今をどう楽しむか、今を生きるしかない。

「夢や目標はありません。スノボをしている時も同じでした。目標は、やっていたら勝手にできるもの。それだけ。」

「二日一日をやさしい気持ちで取り組むことです。」

「挑んでも勝てない。意気込んで勝てない。やさしい気持ち。物を作る時でも、やさしい気持ちです。そういうのができる。」

「技術的にはほとんど同じだと最終的に結果を出す人は人格者。周りのことを考えている人。これは試合で学びました。」

自分自身で自立できているかも大切。しっかり自分を持つこと。

「自分をもつて、周りのことを考えている人が好きです。」

「心の底から楽しんでる人には、敵わない。それが、本当の強さ。」

▼中田一矢

1983年12月4日生
小矢部の駅うどんが大好き。毎日のように通っています。バスラメンも好き。田舎には田舎の生活がある。

▼オヤベ金板工業

富山県小矢部市茄子島195・2
0766・67・2950